

# 子どもたちのやる気引き出す 「WISH教育」提唱者の木原雅子さん

**5月12日 日向市で講演会**

京都大学大学院准教授、一般財団法人日本こども財団理事長で、子どもたちのやる気を引き出すWISH(ウィッシュ)教育の提唱者である木原雅子さん(62)の講演会「日向市ではじまつた、学力向上のための新たな挑戦」は5月12日午後7時から、日向市中央公民館である。同財団主催。同市教育委員会など後援。入場は無料だが、事前申し込みが必要(日本こども財団☎075・771・8885、問い合わせも同じ)。

講演タイトルにある「新たな挑戦」とは2年前、平成26年度から始まり組み、「素直なのに勉強は嫌い。そ



木原雅子さん

**プロフィル** 長崎県諫早市出身。医学博士。社会疫学者。自発的な行動変容を促す教育・指導方法の開発を専門とする。カリフォルニア大学サンフランシスコ校リサーチコンサルタント、ニューサウスウェールズ大学客員研究員、長崎大学医学部助手、広島大学医学部講師を経て現在、京都大学大学院で教壇に立つ傍ら一般財団法人日本こども財団理事長、NHK教育いじめ関連番組専門家委員、文部科学省生徒指導指導者養成研修会講師など多数兼任。

みんな生徒たちを変えたい」きっかけは黒木広充校長からの相談だった。しかし、木原さんのものには、いじめ、不登校、学級崩壊などの課題を抱える全国の学校から助けを求める声が多く届く。教材の開発に要する時間や経費の都合から、その中でも深刻な学校を優先し、1校1回の訪問を基本に対応している状況だつた。

なん生徒たちを変えたい」きっかけは黒木広充校長からの相談だった。しかし、木原さんのものには、いじめ、不登校、学級崩壊などの課題を抱える全国の学校から助けを求める声が多く届く。教材の開発に要する時間や経費の都合から、その中でも深刻な学校を優先し、1校1回の訪問を基本に対応している状況だつた。

心な先生たちが、ここまで努力しても変わらないんだつたら、私は専門家として手伝うべきだう」。取り組みはそこから始まった。

木原さんは、まず初めに「自分探しの授業」を開発した教材を英語、数学、国語の授業に適用し、ありとあらゆる角度から生徒たちの感性を刺激し、目標、勉強の必要性を氣付かせていった。

そこで「嫌いな科目を好きになつてもらおう」と、同中のために開発した教材を英語、数学、国語の授業に適用し、ありとあらゆる角度から生徒たちの感性を刺激し、目標、勉強の必要性を氣付かせていた。

そこから「嫌いな科目を好きになつてもらおう」と、同中のために開発した教材を英語、数学、国語の授業に適用し、ありとあらゆる角度から生徒たちの感性を刺激し、目標、勉強の必要性を氣付かせていた。

例えば、森鷗外の小説「高瀬舟」

を取り上げた3年生の国語の授業。

1時間目は漫画化・映像化された「高瀬舟」を用いながら現代語に訳し、

語句の意味や歴史を楽しく丁寧に説明していく。

弟殺しの罪人である主人公が、島

流しをされるに当たって、お上から

200文を与える——というくだりでは、200文を現代の貨幣価値に置き換えて理解を深めた。

2時間目はクイズ形式の授業。

徐々に抽象度を上げ、最後は「人生の幸せとは何か」を考えもらつぐ

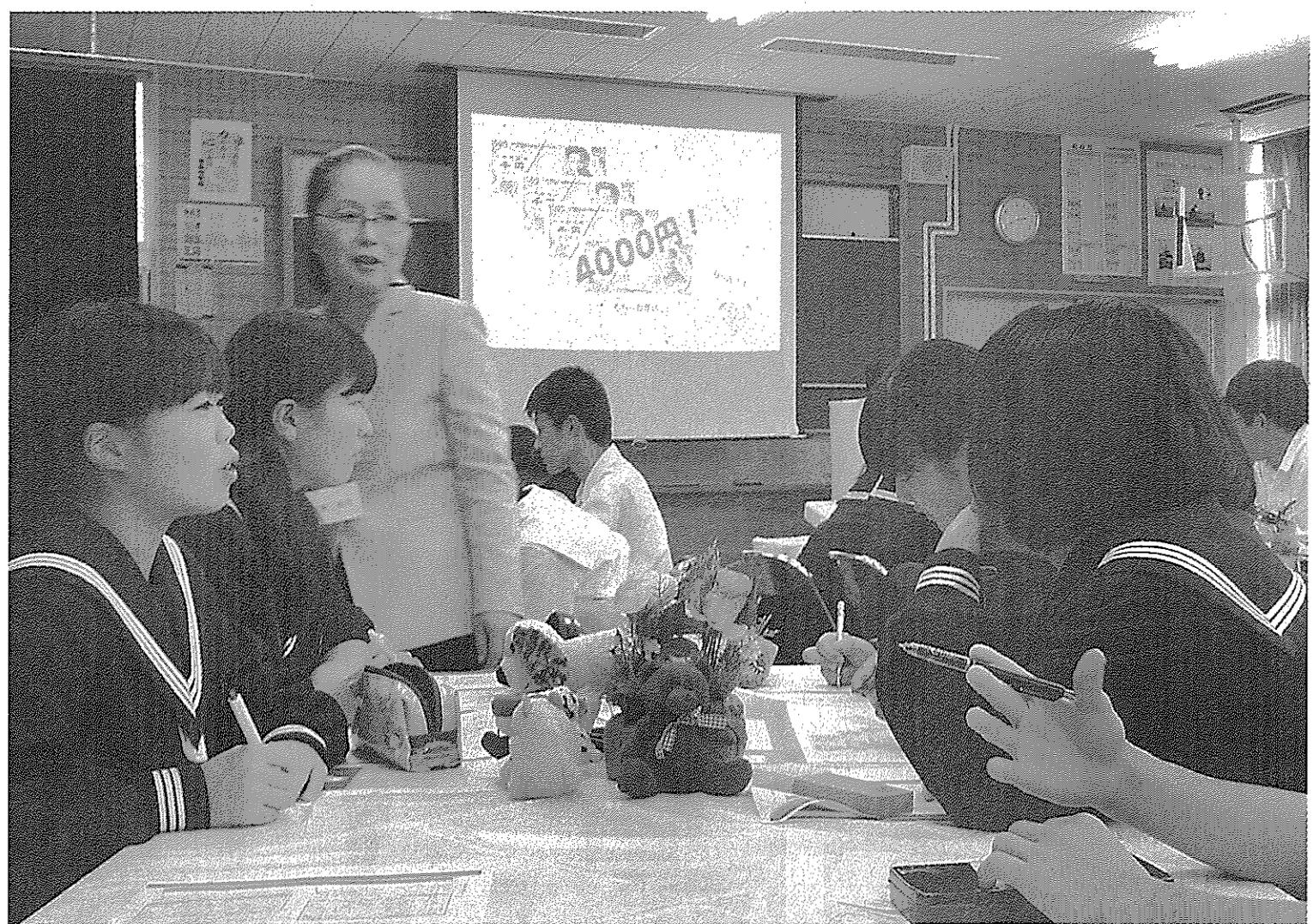
ループワークに発展させた。

「国語の苦手な生徒も成績の悪い生徒も全員で楽しみ、こんなに難しい物語を理解できたといふ達成感

と、その物語に対する考えを自分の言葉で表現し、みんなの前で発表できただといふ自信を付けてもらひたかった。さらに、時代も状況も違う物語からでも、自分の人生を振り返るきっかけになるということを感じてもらひたかった」と狙いを語る。

今回の講演会は、同中で実践してきた授業の教材を「より広く、日向

市の子供たちのために使ってもらいたい」との思いから聞く。同中での授業の様子を録画したDVDを見ながら講演する。



富島中学校での国語の授業風景。3年生と一緒に森鷗外の小説「高瀬舟」について楽しく学んだ(昨年11月)

それでも、黒木校長は諦めなかつた。「話だけでも聞いてほしい」「力を貸してほしい」——2回、3回と連絡を取るうち、平成26年の9月、ようやく同中に来てもらえたことになつた。

「もちろん1校1回のつもりだつた」と木原さん。しかし、その後、

木原さんは2年間で6回も訪問する

ことになる。なぜか。「先生たちの生

徒たちに対する熱心さ、学校を変え

ようとする熱心さが、他の学校とは

全く違つていた。それが私を引き留

めた」

そして覚悟を決める。「こんなに熱

心な先生たちが、ここまで努力して

も変わらないんだつたら、私は専門

家として手伝うべきだう」。取り組

みはそこから始まった。

木原さんは、まず初めに「自分探しの授業」を開発した教材を英語、数学、国語の授業に適用し、ありとあらゆる角度

から生徒たちの感性を刺激し、目標、勉強の必要性を氣付かせていつた。

学力を上げることにより生徒たちの自尊感情を高めようと考えた木原

さんは、まず初めに「自分探しの授業」を開発した教材を英語、数学、国語の授業に適用し、ありとあらゆる角度

から生徒たちの感性を刺激し、目標、勉強の必要性を氣付かせていつた。

そこから「嫌いな科目を好きになつてもらおう」と、同中のために開発した教材を英語、数学、国語の授業に適用し、ありとあらゆる角度

から生徒たちの感性を刺激し、目標、勉強の必要性を氣付かせていつた。

弟殺しの罪人である主人公が、島

流しをされるに当たって、お上から

200文を与える——というくだりでは、200文を現代の貨幣価値

に置き換えて理解を深めた。

2時間目はクイズ形式の授業。

徐々に抽象度を上げ、最後は「人生の幸せとは何か」を考えもらつぐ

ループワークに発展させた。

「国語の苦手な生徒も成績の悪い生徒も全員で楽しみ、こんなに難しい物語を理解できたといふ達成感

と、その物語に対する考えを自分の言葉で表現し、みんなの前で発表できただといふ自信を付けてもらひたかった。さらに、時代も状況も違う物語からでも、自分の人生を振り返るきっかけになるということを感じてもらひたかった」と狙いを語る。

今回の講演会は、同中で実践してきた授業の教材を「より広く、日向

市の子供たちのために使ってもらいたい」との思いから聞く。同中での授業の様子を録画したDVDを見ながら講演する。

「子供たちは潜在的にしばらしい力を持っている。エンジンさえかつたら、頑張りしきくなるくらい伸びていく。そこを引き出せるかは大人の手で子供たちの教育を支えてほしいと願っている」と話している。